

服部美法さんの絵本の魅力

【服部さんとわたし】

ずっと待っていました、服部さんの絵本がメジャーデビューする日を。そして、とうとう出版されました。しかも二つの出版社から二冊ほぼ同時に。うれしくてなりません。

服部美法さんは、四日市の小学校の教師でした。その頃、国語教育を通して知り合いになりました。やがて彼女は、伊勢型紙を学び、その手法による絵本づくりを目指し教師を辞めます。子どもの本専門店「メリーゴーランド」主宰の「絵本塾」に参加、そうして生まれた最初の絵本は、『もりのちいさなはいしゃさん』（山画廊）。四日市市の画廊によって本になりました。

その間わたしとのかかわりはずっと続いていて、そのうち、わたしの中に、わたしの書く文章と服部さんの絵のコラボによる本を出したいという思いがふくらむようになりました。それが実現したのが『学びの素顔～物語で描く「学び合う学び」』（世織書房）です。服部さんの絵は、学び合う子どものすがた、その子どもと向き合う教師のすがたを、実にあたたかく、実にこまやかに、実に美しく描きだしてくれました。わたしのあの本は、服部さんの絵によって引きたててもらいました。

その頃から、メジャーデビューへの期待がふくらんでいて、その期待がとうとう実現したのです。書名は、『おふくさん』（大日本図書）と『つきにいったうさぎのはなし』（学研プラス）です。

【絵本『おふくさん』】

『おふくさん』は、服部さんならではの世界全開の絵本です。まさに美法ワールドです。話の筋も絵もシンプルですっきりしていて、やわらかさとあたたかさがふんわりと伝わってきます。以前から服部さんの絵本の美しさには定評がありましたが、もっと洗練されたという印象です。とにかく見ていて楽しくなるのです。

「おふくさん」とは、一人の名前ではありません。山の奥深くにいっしょに住む10人の総称です。そのおふくさんたちの家に鬼がやってくるのです。鬼はおふくさんたちをこわがらせようとするのですが、逆におふくさんたちは鬼を笑わせようとするというお話です。

わたしは、この絵本を何度も眺めるうち、四つの魅力を感じました。

一つめの魅力、それは、「わらう」ということが、楽しく、ストレートに感じられる絵本だということ



とです。

絵本は、子どもの口に合うように作る「お子様ランチ」ではありません。その程度の意識で作られていた時代があったかもしれませんが、いまや、年代を問わず受け入れられている芸術的出版物です。それは、読者が魅力を感じる絵本には、美術作品としてのクオリティと人として生きるうえで大切な「こころ」の表現があるからです。

服部さんの『おふくさん』に存在する「こころ」、それが「わらい」です。『おふくさん』を読むと、大人も子どもも知らず知らず笑ってしまうにちがいありません。こうして子どもの内に、「わらう」ことの楽しさがインプットされ、大人は、あらためて「わらう」ことの意味と良さを噛みしめることになるでしょう。

「わらい」のほかにもう一つ、『おふくさん』を読んで感じることがあります。それは、人が「共生」する素敵さです。前述したように「おふくさん」とは山奥の一軒家で暮らしている10人の総称です。それはいわば、一つの共同体です。文章には「ふくふくと」暮らしていると書かれていますが、その「ふくふく」ということばに、人と人とのつながり、つまり共同体の素晴らしさが込められています。

「共生」と「わらう」、わたしは、『おふくさん』はこの二つの「こころ」で貫かれていると感じました。「共生」の素晴らしさと「わらう」ことの魅力、その二つによって、恐ろしいはずの鬼までも共同体に取り込んでしまうことになるからです。ここはまさに理想郷であり、その暮らしはわたしたちの憧れなのです。

二つめの魅力、それは、服部さんが描く人物の表情の見事さです。10人のおふくさんたちは、一人ひとり違いが際立つように描かれています。それでいてみんな実にふくよかでおだやかで温かさに満ちたおふくさんなのです。その10人の「おふくさん」が、鬼を笑わせようとして、いわゆる変顔をするのですが、その変顔が三段階でどんどん愉快になっていきます。その変化が見事に描かれていて、見ている自分まで変顔をしてしまいそうになります。きっと、この絵本を読む子どもたちも、いっしょに読む親や先生も、おふくさんに負けない変顔をしてしまうでしょう。もちろん鬼も最後には大口を開けて笑いだしてしまうのですが、そうなるまでの鬼の表情も見ていて吹き出しそうになります。わたしは、この「おふくさん」たちの顔の乱れ？具合をながめながら、服部さんがここまでデフォルメして描いたことに感動してしまいました。そのデフォルメのなかに、服部さんが表そうとする「作品のこころ」が見事に具体化されていると感じたからです。

三つ目の魅力、それは、当然、色彩の美しさを堪能できるということです。服部さんの絵の色にはぎとぎとした圧迫感や強烈さはありません。やわらかくおだやかな自然色による明るい色調です。その色調が、絵本を見る読者の気持ちをおだやかにしてくれます。「わらう」というテーマがすうっと心に響くのはこの色彩だからこそなのかもしれません。

そして、四つ目の魅力、それは、一回や二回読んだだけでは分からないかもしれないものです。服部さんは、この絵本のあちこちにいくつもの「しかけ」をして読者を楽しませようとしているのです。わたしが見つけた「しかけ」をここにすべて書いてしまうと、皆さんがそれを探す楽しみがなくなってしまうから、あえてすべてを記さないことにします。ただ、そのなかの二つだけ述べてみます。

「おふくさん」は10人の総称であると記しました。絵本の本編では10人それぞれの名前は一切出てきません。すべて「おふくさん」として書かれています。それは、あくまでも「ふくふくと」暮らす共同体として描いておられるからでしょう。けれども、表紙の見返しに「おしゅうじ とくいなむつきさん」とか「くいしんぼうの はづきさん」とか全員の名前が書かれています。服部さんは、「むつき」「はづき」ということばからわかるように、10人に陰暦の名称をつけているのですが、こういうところでちょっとした楽しみを醸し出しているように思いました。もう一つは、10人のおふくさん以外に、いろいろな動物が出てきます。物語上、これといった役割を果たしているわけではないのですが、この動物たちが実に楽しいのです。こういう「遊び」があちこちにちりばめられているのです。でも、「しかけ」はこれだけではありません。もっともっとあるのです。小さな小さなものもあります。よくよく探さなければ見つからないものもあります。それを見つけるのも、この絵本の楽しさの一つなのです。

この絵本を読んだ子どもたちは、きっと「わらい」に包まれるでしょう。もしかすると、絵本を楽しんだ後、「わらい」をつくり出す「にらめっこ」を始めるかもしれません。それこそ服部さんの目指すところでしょう。「わらい」に包まれた絵本が、絵本を見る子どもたちの世界を「わらい」のある世界にしていく、そうなることが服部さんの願いなのにちがいません。こうして、服部さんの絵本『おふくさん』は、全国の子どもたちにあたたかさややさしさを生み出してくれるでしょう。いい絵本です。素敵な絵本です。本当にうれしくてなりません。

【科学絵本『つきにいったうさぎのおはなし』】

もう一冊の絵本『つきにいったうさぎのおはなし』は、『おふくさん』とはずいぶん趣の異なる絵本です。表紙の右上に「科学絵本」と記されているように、これは、月とはどういう星なのかを科学的に伝える本です。それが、うさぎを主人公にしたお話の世界と融合して出来上がっているのです。

わたしはこれまでいろいろな子どもの本に接してきました。しかし、お話と科学という二つの世界をつないだ絵本で成功したのではないような気がします。どっちつかずになるからでしょう。けれども、子どもは、その二つの世界を何の違和感もなく共存させています。だったら、こういう絵本こそ子どもに必要なのだと思います。もちろんファンタジー的なお話の絵本が好きな子どもがいるかと思えば、幼児の頃から科学的な本が好きな子どももいます。けれども、幼児期の子どもにはいろいろな可能性があるので。

月に行く、昔の人もそれを夢に見ていたのです。かぐや姫の物語などそうです。その夢物語を実現させたのが科学です。科学の始まりにはおはなしの世界があるのです。子どもはおはなしの世界から科学に入っていきます。そういう意味で、この絵本のもつ意味は大きいです。ひょっとすると、この絵本は服部さんにとっては冒険だったかもしれません。出版社にとってもそうかもしれません。でも、きっと子どもたちはこの絵本を受け入れることでしょう。

服部さんのこの二つの絵本は、これからどのように普及していくでしょうか、子どもたち、そして絵本好きの大人たちにどう読まれていくでしょうか、そして、服部さんの次の作品はどんなものになり、今後、絵本作家としてどのような活躍をされるのでしょうか。とってもとって楽しみです。

その第一歩となる2冊の出版、皆さんもぜひ手にとって読んでみてください。